
< 今日も平和な池袋 >

ムクイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

< 今日も平和な池袋 >

【Nコード】

N1584L

【作者名】

ムクイ

【あらすじ】

* 中途半端な腐り加減です

* 勢いで書いた感が否めません

* 原作を1巻までしか読んでいない人が書いてます

* しかも原作が手元ないので、一人称とか色々捏造してます

それでも興味のある方だけ、どうぞ

Vol. 1

池袋。

ここは様々な欲望が渦巻き交差する、危険な街。
通常なら日常に潜んでいるはずの“非日常”が、ここではとても身近に存在している。

これはそんな池袋の断片。

当たり前のように繰り広げられる、歪んでイビツな、「」の物語。

< 今日も平和な池袋 > Vol. 1

がこん

平和島静雄 と 折原臨也。

池袋で暮らす人間ならまず近寄らない二人組である。

単体ならばまだ多少なりとも対処の余地はある。

バーテンダーの装いに反し、出会い系サイトなどの取り立て屋を生業としている平和島静雄は、怒らせさえしなければさして危険ではない。

そして新宿を拠点として情報屋を営む折原臨也も、その態度こそ鼻につくものの、仕事に関しては右に出るものはいないほどの優秀さだった。

しかし、だ。

この二人が顔を合わせると、そこは必ず戦場と化す。

一本の草も残らず、周りの傍観者すら誰かれ構わず巻き込んで、上へ下への大騒ぎが約束されているのである。

折原臨也がその活動の場を新宿に移してからは束の間の平穏が続いていたものの、何故か最近になって再び池袋に現れるようになった為、そんな日々も終わりを迎えようとしていた。

とにかく。

もしもこの二人が邂逅するという稀有な現場に立ち会ってしまったとしたら、珍しげに観賞などせずに一目散に逃げ出すべきなのだ。

それがアナタの命を保障できる、唯一の方法なのだから――

* * *

そんなわけで、俺はまた臨也を追い掛けている。

今日こそは全てを終わりにしたかった。
そう。

折原臨也の死を以って俺に訪れかけていた平穏な日々を、永遠にする為に。

「くそっ！」

だが、臨也の逃げ足ときたら夏場のゴキブリも驚く程の速さなのだ。
常に前を行く臨也に先導されるように、俺はその後を追い続けている。

標識を引き抜きジャベリンの要領で投げつけ、他にも途中で手に触れた諸々を投げ飛ばしてはみるものの、一向に当たらない。

正直、俺はスタミナがある方ではない。

俺を突き動かしているのは常に“怒り”だ。

途方もなくどうしようもなくただ湧きあがってくるだけのこの“怒り”という感情が、俺の原動力なのだ。

故に持久戦に持ち込まれたら、俺に勝ち目は無い。

それをあいつも重々承知なのだろう。

彼これ5時間ほど走りっぱなしだった俺の肉体は、その限界を当に越えていた。

「、」

ずるり

陽の当たらない路地裏で、俺の両足は急にその全機能を停止させた。たまたま傍にあったゴミ箱に手について、汚らしい壁に背を預ける。

なかなか屈辱的な状況だった。

「おやおや？シズちゃんったら、もう疲れちゃったの？」

俺とは対照的にまだまだ元気そうな臨也が、軽快な足取りでこちらへと引き返してくる。

「やっぱりスタミナ配分は考えなきゃダメだと思うよ？シズちゃんみたいに、いつでもどこでもオールアウトだと、必然的に燃料切れも早まるだろうしさ」

あくまでも教え子を諭すような口振りで、臨也が嗤う。

歪んでいるであろう口元は逆光のせいで見えない。ほの黒いシルエツトをなぞる様な白い光に、目眩がしそうだった。

「…… 何？もしかして本気でマズっちゃったりしてるわけ？」

壁に凭れたままじりじりと地面に沈んでいった俺に、臨也が人差し指でナイフを回転させながら呟く。

無駄に器用な奴。

「ねえ、何とか言いなよ」

「…… っるせーな」

辛うじて絞り出した声に現実味が無い。

無性に煙草が吸いたいの、両腕が重くて動かない。

そうこうしている内に何だか妙に気分が良くなってきた。

脳に酸素が行き届いていないのか、ふわふわと泳ぎ始める思考回路。

視界が徐々に狭まり、現実が、遠のいていく感覚――

「ちょっと!」

ぼんやりと薄らいでいく意識の中、臨也が蹴った泥水が俺の額に跳ねる。

そしてつかつかと俺の目の前に立つと、おもむろに膝を落としてその顔を近づけた。

あまりの距離に、奴の吐息の熱さえをも感じられるような気がした。

「なんか勝手にフェードアウトしちゃってるけどさ、それって無防備すぎるんじゃない?」

頬に触れる冷たい鉄の感触。

それが臨也に突き付けられたナイフである事は言うまでもない。

「このままだとシズちゃんは、俺に殺されちゃうかもしれないね」
ナイフは頬を伝って顎へと流れ、そのまま直下する。

振り子のように揺れるそれは、俺の首筋辺りを幾度となく往復した。

世界で一番ム力つく奴に命を握られているというのに、不思議と危機感は無かった。

いつも人をおちよくるような物言いしかできない臨也が、やけに沈

んだ声をしていたせいもある。

たまにはまともに喋れないのかと思う事は多々あったというのに、
実際耳にしてみるとそれはそれで気色悪い。

無駄な回想に身を投じていると、ふいに臨也の手が力を無くし、同時にナイフも下ろされる。

刹那、

「シズちゃんはさ、俺の事が嫌いなんですよ？」

囁くような、声。

「じゃあ——ちゃんと俺を、殺してくれなくっちゃ」

唐突に零された言葉に、体が反射的に動いた。

昔、新羅は俺に複数回使用可能な火事場の馬鹿力みたいな能力があるんじゃないかと言っていた。

ならばこれは、そんな感じの何かなんだと思いたい。

さっきまでぴくりとも動かなかった俺の右腕は、所有者の意思を介さず勝手に臨也の後頭部辺りを鷲掴み、

「っな、」

咄嗟の事態に一拍ほど認識し遅れたその顔を引き寄せると、そのまま強引に唇と唇を押しつけるといふ、意味不明の暴挙に出た。

「っ！っ！」

「……」

腕の中で逃れようと暴れる臨也を力のみで屈服し、頭を押さえている方とは反対の手で今にも振るわれそうになっているナイフを制止する。

無言の揉み合いの中、サングラスが吹っ飛んで予期せず奴の目を直接覗き込む事となった。

そこに見えたのは怒りと困惑、そして俺の間抜け面だった。

それは、互いに互いの息を奪い合うようなキスだった。

俺も臨也も眼を見開いたまま、相手の顔を睨み続けていた。

時間にしてみれば数秒足らずの事だっただろう。

「ぐ、」

舌の先に走った焼けるような痛み、俺は臨也の体を突き飛ばした。

口の中にじわじわと広がる鮮血の味を噛みしめながら、急激に戻りつつある色彩に脳髓を揺さぶられる。

そんなことは、とりあえずどうでも良かった。

「……く、くくくく、くっははっ！」

半ば呆けたように尻もちをついている臨也目掛けて、俺は最大級の

笑顔を見せつけてやった。

「油断大敵ってなあこのことだな、ノミ蟲よあ？」

「…… うつわあ、シズちゃん最低。殺したくなってきたよ」

表情を見事に引き攣らせた臨也が素早く立ち上がる。

最早完全に力を使い果たし、指の一本さえ動かせない俺は、見下ろされることに甘んじるしかない。

臨也はようやく先ほどの衝撃から立ち直ったのか、いつもと同じムカつくにやけ顔に逆戻っていた。

が、心なしか頬の色はまだ赤い。

そんな臨也は肩を竦めつつ、俺に向かって宣言する。

「はいはい。じゃあ今回はシズちゃんの勝ちってことで。俺は立っててシズちゃんは潰れてるけど、俺は勿論まだまだイケるけど、仕方が無いからへばってるそっちの勝ちってことで妥協してあげるよ」

「…… 手前な」

「おっと！また変なことされたら困るから、今の内に退散しておくよ」

「おい、」

ジャケットの裾を翻し、去って行くこうとする臨也を呼びとめる。

「ちょっと待てよ」

「さっきの続きなら遠慮しておくけど」

「…… そうじゃねえよ。煙草、吸いてえんだけどよ、」

「ああ。はいはい」

臨也は俺が言い終える前に再び眼前に現れると、

「何もしないでよ」

と断りを入れつつ、胸元に手を突っ込んで乱暴に煙草の箱を引き抜いた。

「はい。これでいいでしょ」

「手が動かねえんだから、出して啜えさせてくれよ」

「…… っち」

露骨に舌打ちを漏らした臨也は、それでも箱から一本だけ引き抜くと俺の唇にそっとそれを添えた。

「はい。これで、」

「ライター」

「…… 今度こそ本当に殺したくなってきたよ、シズちゃん」

しゅぽっという音とともに点火したジッポの炎の揺らめき越しに、臨也の瞳が光った。

「はい。これで最後ね」

そのまま服にでも引火されそうな雰囲気だったにも関わらず、俺は奇跡的に無事ニコチンを摂取することができた。

「灰は自分で何とかしてね」

「ああ」

「ついでにアフターサービスとして、新羅でも呼んでおこうか？」
こっちは金取るけど。

片手で銭マークを作つてにやける臨也の顔を見ずに済むように、俺は視線を逸らした。

「別にこのまま寝てりゃそのうちなんとかなるだろう」

「そうだよな。シズちゃんは俺に貸し作るくらいなら、このまま死んだ方がマシってタイプだもんね」

「…… まあな。よく分かってんじゃねえか」

「そりゃあ、シズちゃんの事だから、ね」

俺が何か言い返そうと口を開きかけた時には、既にその姿は遠くなくなっていた。

音もなく現れ、必要以上の騒音をがり立てては、また音も無く去っていく奴だ。

煙草の灰が地面へと積もっていく。

そろそろ意識を保ち続ける事にも限界が来たようだ。

吸い殻を吐き捨てると、それに呼応するように体がどさりと泥水に堕ちた。

シャツにじわじわと滲みて行く冷たい感触も他人事のように不確かで、目の前に落ちているサングラスさえ霞んで見える。

いつそのまま溶けて消えてしまえばいいのに、と少しだけ願った。

そうすれば、

次あいつに会った時、どんな顔をすればいいのか考えなくても済むだろう――

そんなことを思いながら、俺はゆっくりと瞼を閉じた。

Vol.2 (前書き)

Vol.1より明確なBL要素があります。

描写などは特にありませんが、苦手な方はご注意ください。

Vol. 2

池袋。

それは数多の趣向が許され栄える、自由の街。
常識なら都市伝説だと一蹴される“魑魅魍魎”の類も、ここではとても自然に存在している。

これはそんな池袋の裏側。

誰にも知られないまま過ぎて行く、歪んでイビツな「」の物語。

< 今日も平和な池袋 > Vol. 2

池袋の夕暮れ時に、白衣姿の男が一人。

男の名は、岸谷新羅。

主に池袋を中心とし、ヤクザなどを相手に闇医者稼業を営んでいる。

現に今日も組同士の抗争で体内に弾の残った栗楠会の人間に、処置を施してきたばかりだった。

「ふんふんふーん、と、おや？」

自宅で待っているであろう恋人の事を想いながら上機嫌で鼻歌を口ずさんでいた彼は、

「やあ。折原君じゃないか」

すれ違いざまに見かけた人物に向かって声をかけた。

雑踏の中を早足で進んでいた男は振り返ると、端正な顔立ちを歪ませて笑った。

「ああ、新羅か。今日も表沙汰には出来ないお仕事かい？」

「君の方だって対して変わらないじゃないか」

「まあそれもそうなんだけどねえ」

“新宿の折原”といえは、多少は名の知れた情報屋だった。

普段はその通り名のように新宿に居を構え、様々な経路からありとあらゆる情報を入手して顧客に売りつけている。

しかし実際はその情報収集能力よりも、嫌みに屈折した性格やある人物と交戦している姿の方が圧倒的に有名だった。

そんな折原臨也はいつにも増して楽しそうで、何やらそわそわと忙しなく動き回っていた。

「今日のご機嫌なんだね？でもこんなところをまた静雄君に見られたら——」

「そう！良い事を聞いてくれました！」

新羅が漏らしたその名前に、折原臨也は近くにあった標識を掴んでくるくと回った。

「今日はこれから、シズちゃんの家に行ってみようと思ってさ！」

「……え。」

折原臨也の言葉に、新羅の眼鏡がずり下がった。

凍りついた新羅の笑みに気付いているのかいないのか、折原臨也は無駄に飛んだり跳ねたりしながら声高々に概説する。

「最近、色々あってちゃんとシズちゃんに構ってあげられなかったからさ！シズちゃん、多分寂しがってるだろうし俺が出向いてあげようかな、って！」

「……そう」

「俺って優しいよねえ！きっとシズちゃんも俺に惚れ直しちゃうね！はは、楽しみたのしみ！」

「……はあ」

ひとしきり愉快に笑った折原臨也は、

「こうしちゃいられない！早くシズちゃんのところに行ってあげないと」

新羅の方へ大きく一度手を振ると、人ごみの中へと踊るように消えていった。

「まったく、折原君も相変わらずだね」

残された新羅は落ちかけていた眼鏡を掛け直すと、折原臨也の背中に肩を竦めた。

そして、

「……」愁傷様」

見えない誰かに向けて心からの同情を漏らし、その場を後にした。

* * *

そんなわけで、俺はシズちゃんの家の前に来ていた。

別に大した理由があつたわけじゃない。
そう。

大嫌いな俺が突然自宅に現れたらシズちゃんがどんな顔をするのかな、っていう俺のささやかな好奇心。

「お邪魔しまーす」

不用心な事にカギは開いていた。

まあシズちゃん相手なら、入ってきた強盗の方に同情しちゃうけどね。

「な、」

卓袱台のカップ麺を前に胡坐をかいていたシズちゃんは、予期せぬ俺の登場に案の定あんぐりと口を開けていた。

ここまでは俺の予想通り。

シズちゃんが何か言いだす前に、俺はずかしく中へと上がり込む。

といつても手狭なワンルームマンションだ。

玄関からまっすぐ数歩進めばすぐシズちゃんの前まで辿り着いてしまふ。

「いざ、や。お前、何でここに、」

「嫌だなあ、シズちゃん。俺とシズちゃんの仲だから、じゃない」

シズちゃんの間抜け面を見下ろしながら、俺はくつくつと笑った。そしてそれとなく辺りを観察する。

分かりきっていた事ではあるけれど、部屋のどこにも女の影は無かった。

そもそもシズちゃんに付き合っただけで無事でいられる女がいるなら、一度お会いしてみたい。

「っ、てめえ！人んちに来て何にやついてやる！」

おっと。

そろそろシズちゃんの思考回路が正常に動き始める頃合いだ。

本当ならここで退散しておくのが無難だったんだろうけど、俺は何だかもう少しシズちゃんをからかっていたい気分だった。

好奇心は猫を殺すっていうけど、俺は猫じゃないから大丈夫だよな。

「あーあ、シズちゃんの晩御飯はカップ麺かあ。侘しいねえ」

「うつせえぞノミ蟲！とつとと出てけよ、出ていかねえんなら——」

「ていうかさ、手料理を振舞ってくれる女の子とかいないわけ？」

「てめえにや関係ねえだろうが！いい加減、ぶち殺すぞ！」

「あ、ちなみに俺にはいるよー。美人で秘書な女が、一人」

「そんなこたあ聞いてねえんだよっ！」

心底どうでもいい会話を繰り広げながら、俺はとても面白いことを思いついてしまった。

「……仕方が無いなあ」

「おま、勝手に人さまのベッドに腰掛けてんじゃねえよ！」

「可哀想にシズちゃん。どうせあっちの方も寂しいんでしょ？」

「あっちってどっちだよ！何なんだてめえは！」

シズちゃんはとうとう立ちあがって卓袱台を抱え上げた。

上に乗っていたカップ麺はもちろん、その他もろもろ全てがずるずると床に落下して派手な音を立てる。

そんな様子を眺めながら、俺はごろりとベッドに横になり目を閉じた。

「欲求不満って怖いねえ」

「人の話を聞けって言ってるんだよ！」

「だって、俺にキスなんかしちゃうくらいだからねえ」

「っ！あれはそういうつもりで、」

「俺でよければ——いいんだよ？」

「………はあ？」

さっきの怒りはどこへやら。

呆けた顔のシズちゃんは、卓袱台を持ち上げたまま俺の方を見てい

た。

俺は思わず吹き出してしまいそうになるのを堪えながら、さらに続ける。

「だからさ、俺でよければシズちゃんの性欲のはけ口になってあげるよって言ってるの」

「何、言って」

「別に？ 実際、俺ってどっちもいけるからさ」

「そういうことじゃねえだろうが」

困惑が混乱に変わっていく様を目の当たりにするのは面白い。

シズちゃんは心底気持ち悪いものを見るように、眉根をひそめている。

それが俺に向けられているってところが些か心外ではあったけれど、こんな表情のシズちゃんは普段滅多に拝めないから、それだけでもここに来た甲斐があったというものだ。

「冗談だよ、冗談」

俺は乱れたベッドシートに手をついて、立ち上がった。

「悪いけど俺だって、相手くらいは選びたいからさ」

「…… なんだよそれ」

「第一シズちゃんってさあ、絶対慣れてないでしょ？ 俺、痛いのは嫌なんだよねえ」

「……」

「まあシズちゃんにそんな甲斐性が無い事くらい、端から分かってたけどさ」

「—— 今、何て言った？」

ふいに落とされた声。

そのトーンに違和感を覚えた時には、もう既に全てが遅かった。

「痛、」

体が壁に叩きつけられる。

もちろん相手はシズちゃんじゃない。

掴まれた両肩がその握力でみしみしと軋んだ。

「ちよつと、痛いよシズちゃん」

そんな訴えがシズちゃんに届かないことも解っていた。

せめてもの保険にとナイフへ手を伸ばそうとするものの、シズちゃんの力の前ではぴくりとも身動きが取れなかった。

そして悟る。

これはとてもまずい状況だ、と。

「ねえシズちゃん？さっきのは冗談だからさ、もう許してよ」

「言っていい冗談と悪い冗談があんだろぅが」

「だから悪かったって。もう帰るからさ、だから離し」

「俺のどこが“甲斐性が無い”ってか？」

「…… はい？」

「人の事、散々言ってくれたよなあ？慣れてないとか童貞とかインポだとかよお？」

「…… いやいや、言ってないし」

何だかシズちゃんは俺の想像もできないベクトルの怒りを覚えているらしい。

大体いまどきそんなことで真面目に憤る人間がいるなんて信じられなかった。

シズちゃんはいつだって俺の予測の範疇をさらりと飛び越えてしま
うのだ。

だから俺はこの男が――シズちゃんが、嫌いだった。

「じゃあ、見せてみなよ」

この時の俺は多分、珍しく頭に血が上っていたんだと思う。
不測の事態に気が動転していたと言ってもいい。

「ああん？」

「だからさ、その甲斐性とやらを見せてみろって言うてんの」
とにかく正気の沙汰とは思えない。

「俺を抱いてみろって言うてんだよ！」

シズちゃんを、自分からたき付けてみるなんて。

「―― よおし、わかった」

何をわかってしまったのかは定かではなかったけれど、シズちゃん
は薄気味悪い笑みを浮かべて俺をベッドへと押し倒した。

「後悔しても、もう遅いからな？」

* * *

正直、あばらの数本くらいは覚悟していた。

なのに。

最初こそ荒々しかったものの、シズちゃんは意外にも――優しく

まるで壊れものを扱うような手つきに、俺は不覚にも意識を飛ばされそうになってしまった。

確かに気持ち良かったのは認める。

『初めてじゃなかったんだね』なんて悪態を吐いてみる余裕もないほど、俺は自分より一回り大きいシズちゃんの体に、浅く深く溺れた。

けどまあ俺だって流されっぱなしだったわけじゃない。

押し寄せては這い上がってくる快樂の狭間で、何度かシズちゃんを拒もうとしたのは覚えている。

その度に結局強引に攻め立てられて、喘いで果ててを繰り返した拳句――　　どうやらいつの間にか気を失っていたようだ。

「……　　ヤリ倒れるってどうなのよ？ 発情期の猿じゃあるまいし」

あれからどれくらい経ったのか。

気がついたときには部屋の中は真っ暗で、隣にはシズちゃんが寝ていた。

元々寝起きは良くなかった方だけど、これはあまりにも最悪の目覚めではなからうか。

「やれやれ、どうしたものかな」

暗闇に慣れてきた目に、見覚えの無い天井が映った。
横を向けばシズちゃんの背中が見える。

その奥には倒れた卓袱台や脱ぎ捨てたままの洋服、雑然とした部屋の様子が窺えた。

「―― 気に入らない」

それだけだというのに。

何故だか、無性に全てをぶち壊してやりたくなった。

テレビ。壁。卓袱台。枯れかけの鉢植え。スプリングの軋むベッド。

安心しきったシズちゃんの背中も何もかも。

全部全部、消えて無くなってしまうればいいと思った。

そして何よりも不愉快だったのは、この状況にどこか心地よさを感じてしまっている自分自身の存在だった。

「俺は、シズちゃんが嫌いだよ」

確認するように宣言してみる。

シズちゃんからの反応は無い。

節々が痛む上体を持ち上げ、下半身に残る違和感に顔を顰めながらも、俺は起き上ってシズちゃんの顔を覗いた。

無防備な寝顔だった。

僅かに開かれた口からは規則的に息が漏れている。

昼間の形相からは想像も出来ないようなその姿に、いつの間にか自分の両手がシズちゃんの首にかけられている事に気付き、そしてほんの少しばかり驚いた。

シズちゃんの体温を掌に感じながら、ぼんやりと夜闇を仰ぎつつ、俺は思った。

シズちゃんは、“可哀想”だ。

全人類を愛している俺に例外的に愛されないたった一人の人間。

それがシズちゃん。

俺が惜しみなく注ぎ続ける愛を突き返し、理解される事を拒んだ、どこまでも愚かで果てしなく馬鹿な男。

周囲に暴力を振りまいては恐れられ、大衆の中で孤立していくしかない異形なシズちゃんという存在は、もはや憐みさえ覚える。だから、

「そんなシズちゃんは——死んじやった方が、良いよね？」

両手にそつと力を籠める。

眠ったまま死ねるならシズちゃんも本望だろう。

じわじわと圧迫していく感覚に、自然と鼓動が速くなる。

シズちゃんがなくなったらなら、色々とやりやすくなるだろう。
俺が池袋に現れても自販機が飛んでくる事はないし、思考を巡らす
度にいちいちシズちゃんという未知のファクターを念頭に置かなく
て済む。

シズちゃんのいない世界。

それは。

そんな世界は、――

「、はは。冗談だよ」

誰ともなく呟いて、俺は両手を離れた。

「どうせ俺の力なんかじゃ、シズちゃんは殺せないしね」

汗でじんわりと湿った手でシーツを握りしめながら、俺は自身の浅
はかさを嗤う。

本当は分かっていた。

シズちゃんは、ちつとも可哀想なんかじゃない。

どんなに暴れても、大多数に倦厭されていたとしても、シズちゃん
は一人ぼっちじゃなかった。

シズちゃんの傍にはいつも誰かがいてくれる。

それはお世辞にも社会的に真つ当だとはいえない人選だったけれど、
それでもシズちゃんに笑いかけ、シズちゃんの為に見返りもなく動
いてくれるような連中だった。

「……シズちゃんは人気者だね」

むしろ本当に可哀想だったのは、

何時だって孤独だったのは——俺の方だ。

別にその事について悩んだり悲しんだりしているわけじゃない。

自分の性格からして当たり前だと思っていたし、誰かと必要以上に慣れ合ったりするのは肌に合わないんだと自覚もしていた。

だけど、時々シズちゃんを見ていて思う。

俺とシズちゃんは鏡合わせのように対極で、それでいて一番近い存在だ。

それなのに、この違いは何なんだろう、と。

一体どこで間違えてしまったのか。

そもそも自分が間違ってしまったのかもわからない。

俺は自分の生き方にそれなりの誇りを持っていたつもりだし、今更変える気なんかもさらさらない。

毎日はそこそこ楽しかったし、人という種がこの世に存在している限り俺の探究心も尽きるところを知らない。

でも面白いはずの世界が、ふと色褪せて見える日がある。

全てがどうでもよくなつて、ただ空虚な感情のままに銃口を咥えてしまいたくなる気分になるのだ。

「きつと俺にはその引き金は引けないから」

その感情は屈折し、飽和されること無く形を変えて排出される。故に俺は嘔き続ける。

「俺は――シズちゃんが、嫌いだよ」

細い声はまるで届かない祈りのように闇に吸いこまれ、跡形もなく消えた。

* * *

部屋のシャワーを勝手に借りて服を着込んだ頃には、カーテン越しに見える空が白み始めていた。

この分だと、日が昇り切ってしまう前に自宅のベッドにもぐり込めそうだった。

濡れたままの髪で外出するのは気が引けたけれど、その辺でタクシ―を捉まえてしまえばいいかと開き直す事にした。

刹那、

「――帰るのか？」

玄関へと向かっていた足が止まり、思わず舌打ちが漏れる。
シズちゃんの意識が覚醒する前にこの部屋を出ようと画策していたというのに。

「やだなあ、起きてたの？」

「今、目が覚めたんだよ。まったく、起きぬけ早々見えたのがお前の姿なんてなあ、悪夢だな」

「ほんと。最悪のタイミングだね」

暗がりの中、俺はシズちゃんを振り返って笑う。

「でも酷い言い方だねよねえ？昨日は散々俺を抱いたっていうのにさ」

その一言で、煙草へと伸びたシズちゃんの手が空中で静止する。

「…… やっぱ悪夢じゃねえか」

「大丈夫、大丈夫。別に誰にも言ったりしないから」

「当たり前だろうが！」

「あ、でも情報として要求されたら売っちゃうかもなー。どうしようかなあ」

「てめえ……」

シズちゃんは煙草の箱を片手で握りつぶして、わなわなと震えていた。

「なあ、イザヤよお」

煙草を啜えたシズちゃんが、紫煙の向こう側から話しかける。

何となく帰り辛い雰囲気になってしまったので、仕方が無く壁にもたれ掛っていた俺は投げやりな返答を返した。

「何？」

「お前さ、もう池袋に来んじゃねーぞ」

「はは、まだそんなこと言ってるの？ていうか、この期に及んで言うことがそれってどうなの？」

「うるせえよ。俺が来んなって言ったら来んな」

「…… こんなことなら」

シズちゃんなんか無視して、さっさと出ていけばよかった。
いや、それ以前に変な気まぐれなんか起こして、シズちゃんに何か
会いに来なければよかったのだ。

「後悔先に立たず、とは昔の人もよく言ったものだよねえ」

「はあ？何の話だよ」

「ただの独り事だよ」

説明するのも億劫だったので、俺はひらひらと手を振ってシズちゃんをあしらった。

「でもシズちゃんには俺を殺せないと思うよ」

「いいや。俺はお前を殺す。必ず殺す。意地でも殺す。だから今日
だけは見逃しておいてやる。今の内にとつと出てけや」

「はいはい。そういう事は実際に俺を追い詰めてからいいましょ
うね」

「殺す殺す。俺は殺す。お前を殺す。絶対殺す。何が何でも殺す。
完膚なきまでに殺す。何故だかわかるか？」

「どうしてだろうねえ」

あまり興味が湧かなかった。

リミッターの外れかかったシズちゃんは饒舌になるなあ、なんて俺
はそんなことを考えていた。

ただ俺の退屈は、シズちゃんが放った次の言葉によって粉々に砕
かれた。

「俺は、お前が——大っ嫌いだからだ！」

「、」

目の前に星が見えたような錯覚。
脳内で火花がスパークし、シナプスとシナプスが急速に連鎖していく感覚。

「…… もう一回」

「あん？」

「さっきのやつ、もう一回言って？」

「お前を殺す。絶対ころ」

「そこじゃなくて！」

自分でも気持ち悪いほどに高揚していくのが分かる。

抑えきれないこの衝動。耐えきれず叫び出してしまいそうなほどの、
衝撃。

「何なんだよ！意味わかんねーよ！」

シズちゃんが頭を掻き毟る。

そんな仕草にすら、自然と笑みがこぼれる。

「俺のこと、嫌いって言ったよね？」

「おう」

「本当に？」

「ああ」

「絶対に？」

「おお」

「この世の誰よりも？」

「んだあああっー！面倒臭えー！いちいちうつせえんだよ！」

ベッドの中から飛び出たシズちゃんが、素っ裸のまま俺を指差して
高らかに宣言する。

「俺はお前が世界で一番嫌いなんだよ！気に食わねえ、いけ好かねえ、殺して殺して殺し尽くしたって物足りねえ、そんならいお前の事が大大大、大っキライなんだよ！！！」

「—— そう！」

「んだよ、何でそこで嬉しそうなんだよ！」

「シズちゃんには解らないよ、きつと」

誰にも理解できなくても、俺だけには解る。
その言葉が持つ意味。

俺は —— 独りなんかじゃ、無い。

シズちゃんがここに居る限り、
この世界に存在していてくれる限り、
俺を嫌いだと言い続けてくれる限り、俺はいつでもシズちゃんを通して世界と繋がってられる！

『嫌い』 は 『無関心』 よりも貴い。

引き金を引く事ができないのなら、誰かに弾いてもらえばいいのだ。

しかしまあ俺だってそう簡単にやられてやる気はない。

世界はまだまだ面白いことだらけだったし、何より俺の手元にはデユラハンの首がある。

「決いめた。やっぱり俺、言っちゃおう。欲情したシズちゃんに無理やり犯されましたって」

「ば、！おま、おいてめえっ！」

「それからシズちゃんは凄い早漏だったって付け加えておくね」

「…… よーし分かった。やっぱりお前は今殺す！すぐ殺す！全部すっ飛ばして今すぐ殺すなう！」

「あはははは！やれるもんなら、やってみなよ！」

シズちゃんが追いついてくる前に、俺は扉の向こう側へと滑りこんだ。

池袋の朝は淀んだ排気の臭いしかなかったけれど、そんな濁った空気と相反して、俺の心情は清々しい程に澄み切っていた。

「—— さあて、と」

今日は何をして遊ぼうかなと、俺は灰色の空に向かって問い掛けた。

Vol.2 (後書き)

これを書いている間、ずっと「裏表ラバーズ」と「恋は戦争」を聞いていました。

僕の中の2大サイズザソングです。

Vol. 3

池袋。

そこは普通の人々が普通に過ごす、極々平凡的な街。
暇を持て余した若者から観光で訪れた外国人に至るまで、ここでは
誰もが何かを探している。

これはそんな池袋のワンシーン。

まるで台風の目のように穏やかな、
けれどやっぱり歪んでイビツな 名もなき 「」 の物語。

< 今日も平和な池袋 Vol. 3 >

池袋にはややこしい事にサンシャイン通りが二つある。

様々な娯楽施設や大型ホームセンター、多種多様な飲食店が並びひ
しめく通りは“サンシャイン60通り”であり、本来のサンシャイ

ン通りはその北側に存在している。

サンシャイン60通りの華やかさとは裏腹にサンシャイン通りは店舗数も少なく、比較的閑散としていた。

そのせいなのか、一般的にサンシャイン通りだと認識されているのは人で賑わうサンシャイン60通りで、池袋の地理に明るくない人間ならばサンシャイン通りがもう1本存在することさえ知らない場合が多い。

池袋に数ある映画館の中で最も知名度が高いのは、やはりサンシャイン60通りに面したシネマ・サンシャインだろう。

全体的に新しい劇場では無いものの、1番館から6番館までの6スクリーンでは洋画や邦画の超大作から単館系の芸術作品まで幅広く取り扱っている。

そのシネマ・サンシャインを越えた先にある駐車場の前で、人の流れをぼんやりと眺めている男がいた。

彼の名は、門田京平。

俗に言う“何を生業としているのかよく分からない”若者ではあったが、この池袋の街では何故かそこそこの名を知れている人物だった。よくキツネ目の青年と黒い洋服の女性と一緒に、アニメキャラクターがペイントされたワゴンにその所有者を含む4人で乗車している姿が目撃されている。

しかし今日は珍しく彼らの姿は見当たらず、駐車場のフェンス前に置いた段ボールに腰掛けながら、何やら仕事で使っらしい工具を心半ばに磨いていた。

「やあ。」

ふいに暗くなった視界に門田が顔を上げる。

「相変わらず真面目だね、ドタチンは」

「…… だからその名前で呼ぶなって、いつも言ってるだろ」

少し迷惑そうに漏らした門田の目の前には、黒いコートを羽織った折原臨也が猫のような微笑みで立っていた。

「いやいやいや。休みの日まで仕事道具のお手入れとは、さすがの俺も感心しちゃうね」

「まず言わせてもらうが、何故お前が俺の休日を知っている？ そしてどうして当たり前のようにそこへ腰掛ける？」

「んー、会って早々質問が多いなあ」

門田の座っていた段ボールの端に無理やり割り込むと、臨也は聞き分けの無い子供にするようにやれやれと首を振った。

「で、ドタチン。ちょっと俺からも質問していい？」

「…… 俺の質問に答える気は無いのか」

「いいじゃない。こんなこと滅多にしないんだから」

「…… まあ言うだけ言ってみろ」

強引に話を進めようとする臨也に観念したのか、門田は諦め混じりの溜息を吐いて承諾した。

「やっぱり持つべきものは人への愛と、ワールドピース略してドタチンだね」

「俺は世界平和と同義なのか」

「とりあえず本題なんだけどさ、」

「……」

「俺さ、この間シズちゃんと寝ちゃったんだけど—— どう思う？」

「っ、な！」

ドタチンもとい門田の手から、鈍色の工具が派手な音と共に落下する。

慌ててそれを拾い上げると、門田は臨也の横顔をまじまじと眺めた。

「それは…何かの冗談か？」

「んー、冗談だったらまだ良かったんだけどねえ。ていうかドタチンの顔、超真っ赤だけど大丈夫？」

「いや、そりゃ赤くもなるだろう。お前と静雄が、その……」

「ははは、今度は青くなつたね。忙しないなあ」

「おわっ！」

臨也に人差し指で頬をぐりぐりと突かれた門田は、思わずその手を払いのけて立ち上がった。

「え、俺なにかした？」

そんな様子をぽかんと見上げた臨也が、茫然と問い掛ける。

「その、アレだ。そういう事は色々と……マズイだろ」

「……ふうん」

「何だその反応は、って、ぎゃ！」

いきなり足元に纏わりついてきた臨也に、門田の口から苦虫を噛み潰したような悲鳴が零れる。

必死に振り払おうとするものの、今度は立ちあがった臨也に耳元で息を吹きかけられた。

「ちよ、だからやめろって！」

「何で？別にいいじゃない。俺、ドタチンの事わりと好きだし」

「――！！」

刹那、空気と門田が凍りついた。

その様子をしばらく面白そうに観察していた臨也だったが、

「ねえドタチン、いつまで彫刻の真似事なんてしてるわけ？」

飽きてきたのか、門田の眉間をトントンと突いて回復を促した。

対する門田もはっと我にかえり、臨也との距離を図りながらも人としての活動を再開させる。

「…… お前な」

「何？」

「こんなところを静雄に見られたら、俺の命が危ないだろうが」

「全然平気でしょ。だって俺達、別に付き合ってるわけじゃないし」

「そ、そうなのか？」

「それにさ、」

見えない誰かと影踏みをするようになってくると動き回りながら、臨也はうつすらと目を細める。

「シズちゃんと寝てみて改めて確信したんだ。俺はシズちゃんが大嫌い！そしてシズちゃん以外の人間を須らく愛してる！って事をね」

「…… はあ」

「シズちゃんの方も同じだと思うよ。ていうか俺にゾッコンなシズちゃんとか想像してみてよ。超絶に気持ち悪いでしょ？」

「そりゃあ、まあ」

「だからさー！」

臨也は大声で叫ぶと、段ボールの上にぴょんと飛び乗った。

勿論人の目を気にする様子など微塵もない。

世界のあるべき姿を提唱するように、この世の真理を眼前の群衆相手にひけらかすように、臨也は両手を広げる。

「だから俺とシズちゃんはこれからも殺し合う！今まで通り、何一つ変わる事無く、この池袋の日常を非日常のベクトルに進みながら、今日も今日とて殺し合うんだ！」

「……」

臨也が言い放った言葉について、門田は特に触れようとしなかった。宣言者である臨也本人も、自身の見解に対する意見を求めているようには見えなかった。

「それじゃ、ドタチン。俺の些細な悩み相談に付き合ってくれて有難う」

「ああ。何の役にも立たなかったみたいだが、お前の気が済んだのならまあそれでいいんだろう」

「はは、やっぱりドタチンは誰かさんと違って優しいな。それじゃ、俺はこれからシズちゃんに見つからないよう帰るから—— またね！」

踊るように去って行く臨也の後ろ姿を見送りながら、門田は静かに思う。

折原臨也は怯えているのだ。

不変的に続いていくと信じていた平和島静雄との関係が歪んでしまふ事を、心の底では恐れているのだろう。

そもそも臨也が抱いている平和島静雄に対する嫌悪感というのは、静雄を理解できず畏怖の対象として見てしまう自分を誤魔化す為に派生した感情だ。

＜分からないから怖い、だから嫌いになる＞という方程式は、いわば暗闇を無意識に怖がる子供のそれに近い。

折原臨也という人間は人生を達観しているようで、本質的にはとても無垢な人間だ。

もしも今まで繋ぎ止めていた何かが千切れてしまっくらいなら。蓋をして堰き止めていた想いが溢れ流れ出してしまうくらいなら。

いつそ――“大嫌い”だと叫び続けている方が臨也にとって、楽なのだ。

「嫌いくらいは何とやらってやつか……　　ったく、随分と傍迷惑な奴らだよ」

突き抜けるような青空を仰ぎつつ、門田は本日2度目となる溜息を吐いた。

時刻は正午間近で陽も高く、街は昼休みのサラリーマンやOLで混み始めている。

そんないつもの日常を前に、門田京平はそつと呟く。

「まあそれにしても、池袋って街は――」

* * *

とある小説シリーズが流行り出してから、池袋西口公園はその知名度を飛躍的に上げた。

しかし実際に訪れてみると、“公園”というその名称に首を傾げずにはられない。

一般的に公園をイメージさせる遊具の類は見当たらず、広場のような空間には石のオブジェや野外ステージなどが設置されている。

東京芸術劇場が隣接しているので人通りはそれなりにあるものの、ベンチに座って休んでいくような雰囲気でもなかった。

綺麗に整備されてはいるが、無機質さを感じさせるなタイル張りの地面も公園らしからぬ要因のひとつかもしれない。

良くも悪くも開放的な池袋西口公園で唯一本来の在り方を彷彿とさせているのが、その中心部にある噴水だ。

昼間は休憩中のサラリーマンやOL達にマイナスイオンを提供し、黄金色にライトアップされた夜間は恋人たちが集う恰好のデートスポットとなっている。

その噴水が見渡せる位置にあるベンチに、奇妙な2人組が腰かけていた。

一人は黒いベストに蝶ネクタイを着用した金髪の若い男。

どこからどう見てもバーテンダーそのもののだが、口に咥えられた煙草と黒いサングラス姿に妙な違和感を覚える。

男の横に座っていたのは、黒いライダースーツを身にまとった妙齡の女性。

よほどのプロポーションでなければ映えないエナメルのを完璧に着こなしている彼女ではあったが、何故かその顔は動物の耳のような飾りがあしらわれたヘルメットで覆われていた。

他人から浴びせられる奇異の視線にも慣れているのか、2人はただ黙って餌を啄ばむ鳩の群れを眺めていた。

そんな中、

「なあセルティ。ちよつと相談なんだけだよ、」

煙草の灰を落としながら、平和島静雄がそっけなく呟いた。

セルティはどこからともなくPDAを取り出すと、喋っているのと変わらない速度で言葉を紡ぐ。

『何だ？』

「いや、別に大した話じゃねえんだけど、」

『遠慮をするな。私で良ければ何でも言ってくれ』

なかなか言いださない静雄の背中を押す様に、セルティは力強く頷いた。

「そうか」

やがて決心がついたのか煙草の火を消すと、静雄は改まってセルティに向き直った。

「俺、このあいだ臨也の奴と寝ちまつたんだけどさ——」

ガタン

「・・・・・・・・あ？」

隣に座っていた筈のセルティはベンチから飛び退くと、静雄が辛うじてPDAの文字を読める距離まで遠ざかり

『ど、どななな、え、い今何て言iiiiiiiiましたか？』

もの凄い勢いでPDAに入力していった。

「おい、微妙に意味わかんねーぞ。つうか口調まで変わってるしよ」

『だ、だってお前が急に臨也と、その、ね、ね、ねねね寝た、なんて言い出すからっ！』

「まあマジな話だし」

『！！！！！！』

声に出せない分、セルティは自身の驚きを体現するかのように仰け反り、頭を振って恐れ慄いてみせた。

対する静雄は特に気にすることもなく、2本目の煙草へと手を伸ばしている。

「正直、俺もまだ実感が湧かねえんだけどよ……」

臨也が突然押し掛けてきた経緯を簡単に説明しながら、静雄は面倒臭そうに溜息を吐いた。

「あいつの安い挑発に乗っちゃった俺も馬鹿だけどさ、やっぱり諸悪の根源はノミ蟲の野郎だとお前も思うだろ？」

『それはまあ、私の口からはなんとも言えないな』

大分落ち着いてきたのか再びベンチに舞い戻ってきたセルティが、PDAをかざす。

『そういうことはこう、成り行きというか……やはり2人の問題だからな』

「気味悪いこと言わないでくれ」

まるで羽虫をあしらうようにぱっぱと手を振ると、静雄はサングラ

ヌを外した。

「あーそれでセルティ、俺はこれからどうすればいい？」

「……それを私に聞くのか？」

「俺がこんなこと相談できる奴、お前しかないからな」

「静雄……」

それはセルティにとって、素直に嬉しい言葉だった。

池袋で暮らす様になってから暫く経つが、静雄は自分が人とは違う異形の存在であるということを理解した上で対等の関係を維持できる、掛け替えの無い友人だ。

随分と厄介な相談を持ちかけられたものだと思ってしまうものの、親友が真剣に悩んでいるというのであれば一緒に考えてやるべきなのだろう。

セルティは決意を固めたように拳を握った。

「それで、お前と臨也は付き合っているのか？」

「っ、誰が、！ あんな奴と……！」

静雄の絶叫に鳩がバサバサと飛び立ち、セルティの決意が砕け散った。

公園を歩いていた通行人もそのただならぬ気配に頭を低くして、足早に遠ざかっていく。

その様子をおろおろと眺めているセルティを他所に、静雄の怒りは止まるところを知らなかった。

「俺と、臨也が！付き合うなんてことになったら……俺は、臨也を殺して……俺も死ぬっ……！」

『わ、分かった！私が悪かった！だからとりあえず座ってくれ！頼むから！！』

「・・・・・・・・・・ ああ。すまん」

そのまま放っておくとベンチを持ち上げて振りまわしそんな勢いの静雄を慌てて宥め賺すと、セルティは自身の軽薄な発言に胸の前で十字を切った。

しかし肉体関係の有無は容認できても恋人になるのは許せないというのは、彼女にとって理解不能な感覚だった。

『すると何だ？お前は今でも臨也の事が嫌いなのか？』

「ああ！大っ嫌いだ！」

『臨也はまあ“あんな奴”だし、確かに私もあまり好きにはなれないが、お前は高校のときからの付き合いだろう？』

「んなの関係ねえんだよ！嫌いなもんは嫌いなんだ！大っ嫌いだ！あー殺してやりてえ、ていうか殺す殺す殺す殺す……」

『…………… それは』

提示しかけて、セルティは躊躇った。

「何だよ？」

『いや、何て言ったらいいのか…………… それはつまり、だな』

「はつきりしてくれよ、セルティ」

『じゃあ言うが、それは—— 以前とまるで変わらないんじゃないか？』

「—— おお。」

「……」

「……」

「……」

「……セルティ」

「な、何だそんな顔で私を見るな」

突然黙ったかと思えば今度は唐突に手を掴まれ、セルティは思わず腰を浮かせた。

が、それも束の間。

「セルティ、お前…… やっぱすげえな」

「…… はい？」

静雄は困惑するセルティを満面の笑みで見つめ返した。

「そうだよ。そうだろ。そうなんだよ！何も変わっちゃいないんだよ！」

「ちょ、ちよつと静雄！？」

「はははは！そうかそうか！そうなんだよなあ！」

腹を擦って一頻り哄笑すると、静雄は目尻に浮かんだ涙を拭ってサングラスを掛け直した。

「そんなわけで、俺はちよつくら行ってくるわ」

「い、行くつてどこへ？」

「決まってるだろ？2、3発ほど臨也の野郎を殴りに行くんだよ」

「どうしてそう決まってるんだ！？」

あまりの急展開に、セルティはPDAを揺らしながらバンバンとベンを叩いて抗議する。

しかし既に立ち上がって臨戦態勢の静雄は、両手をぱきぱきと鳴らしながら上機嫌に微笑んだ。

「よし、殴るだけじゃ気が済まねえ。今日こそは殺す。絶対殺す。」

死んでも殺す。何が何でもぶち殺す！——じゃあなセルティ！」
「……ああ。またな」

心なしか楽しそうに去って行く静雄を茫然と眺めながら、セルティは肩の力を抜いた。
そして、その後ろ姿に考察する。

静雄と臨也は互いに互いを“嫌い”なのだと主張して憚らない。

しかしその言葉が本心であるのなら、静雄か臨也のどちらか、あるいはどちらも疾うに死んでいてもおかしくはないのだ。

双方ともにそれだけの力を持っているし、純粋な実力では劣る臨也も本気を出して策を練れば十分静雄を圧倒できる可能性はある。
それなのに。

口では色々と言っているが、静雄と臨也が共に <生きている> という現実が、唯一無二の真実なのではないだろうか？

（ まったく、静雄も臨也も素直じゃないな ）

空は薄らと朱色に染まり、西口公園にも学校帰りの若者たちが目立ち始めている。

もう少しすれば帰宅ラッシュの時刻になり、道路も混んでくるだろう。

セルティはPDAをしまい、傍に停めてあるバイクのシートをそつと撫でた。

（ 新羅が聞いたら何て言うかな。きっと驚くだろうな ）

愛用している眼鏡をずり落とさんばかりのリアクションをする恋人の姿を思い浮かべて、セルティはくつくつと笑った。そして穏やかに流れ行く桃色の綿雲の下、今日という一日に感謝しつつ、心の中で呟く。

（ ああ。本当にこの池袋という街は —— ）

* * *

東急ハンズ池袋店。

サンシャイン60通りのシンボリックな存在として際立つその場所は、待ち合わせに利用されることが多い。

時刻は夕食時ということもあって、きよろきよろと人を探す顔がちらほらと見受けられた。

「渋谷といえばセンター街！新宿ならば歌舞伎町！そして池袋ときたら、それは勿論サンシャイン60であると！俺はここに！声高らかに宣言しよう！」

喧騒の片隅。

制服姿の茶髪の少年が、芝居じみた口調で連れの少年に語りかけていた。

「なあ帝人、お前もそう思うよな？ なっ！？」

「はいはい。正臣の言うとおりだね」

帝人と呼ばれたその少年は適当に相槌を打ちながら、携帯電話を覗き込んでいる。

「ていうか僕もうお腹空いちゃったんだけど…… 帰っていい？」

「うーん。そうだな、俺も超ベリーハングリーに腹減っちゃったっていつか？ ここは不況の風を打破するためにもぱーっと露西亞寿司でも行っちゃうか！？」

「僕、今月そんなに余裕ないんだけど」

「大丈夫ノープロブレム！ 斯くいうこの俺も、じり貧であるという以前に今日は財布すら所持していないのである！」

「…… そんな自信満々で言われても困るんだけど」

サタデーナイトフィーバーのポーズで爽やかに微笑む正臣の横で、帝人は今日も長くなりそうな気配を感じていた。

そんな刹那、

「iiiiiiiiいざあああああやあああああー！！！！

」！

獣のような咆哮と共に、道の向こうから道路標識を携えた平和島静

雄が人をかき分けるように現れた。

こめかみには血管が浮かび上がり、サングラス越しの両目は危険に血走っている。

「ちよろちよろちよろちよろちよろちよろちよろちよろ逃げ回りやがつてよおおおお！！！」

「—— 嫌だなあ、シズちゃん。逃げるのは当たり前じゃない」

「えっ？」

その声に帝人が振り返ると、そこには気だるそうにナイフを構える折原臨也が立っていた。

「い、臨也さん！いつの間に……」

「やあ。制服姿で夜遊びの算段とは感心しないなあ」

「別にそんなつもりじゃないですけど」

「そんな君たちに耳よりな情報だ。実は今日——」

「んだてめえ…… 何フツ―に会話してやがるっ！」

「おっと、」

コートのポケットに手を伸ばした臨也の頬を掠めるようにして、道路標識が地面に深々と突き刺さる。

「大体よお、俺はお前が息を吸ってること自体が許せねえんだよ！地球上の酸素が勿体無いだろうが！」

「あは！じゃあシズちゃんが呼吸をやめれば一件落着になるんじゃない？」

臨也は挑発するように晒うと、帝人の手に何かを押しつけた。

「俺としてはもっと君たちと話していたんだけど、今日のシズちゃんはいつにも増して俺を殺る気みたいだからね」

「はあ」

「それじゃ！」

くるりと踵を返すと、折原臨也は踊るように雑踏の中へと消えていった。

「あ、てめ！また逃げんじゃねーよ！ノミ蟲いいいいいい！！！」

その後を追う平和島静雄の姿は、さながらマタドール目掛けて突進していく闘牛のようだった。

「ったく。相変わらず、よくわかんねえ人たちだよな」

「うん。そうだね」

強張った表情の正臣とは対照的に、帝人はどこか嬉しそうだった。

「でもさ、あの2人がああやって喧嘩している内はまだこの街も大丈夫なんじゃないかって気がするよね」

「…… はあ？お前、何言っちゃったの？」

幼馴染の顔を眺めつつ、正臣が呆れたような間の抜けた声を漏らす。

「うーん、僕にもよく分からないけど、」

帝人は少しだけにはかんだように、しかしどこかに確信を込めて、

「今日も池袋は—— 平和だな、って」

ネオンの毒々しい光を見上げて呟いた。

「いやいやいや？全然まったくこれっぽっちも平和じゃねえし。臨也さんは銃刀法違反だし、かたや器物損壊だぜ？」

「……まあそう言われてみるとそうなんだけど」

突如道の真ん中に生やされた道路標識を珍しそうに携帯の写真に収めていく通行人に、帝人は小さく苦笑した。

「そっぴや帝人、お前さっき臨也さんから何もらったんだ？」

「あ、そっぴえば……」

ふと思いついたように手を開くと、帝人はそれを自分と正臣の前にかざした。

「これって……」

「一体どこから聞いてたんだろうな、あの人」

「さあ？」

くしゃくしゃになった露西亜寿司の割引券に帝人は思わず噴き出し、つられたように正臣も笑い出す。

「よし！これで帝人の奢りは決定だな！」

「ええー！？」

「善は急げ！急がば廻れ！そして少年は壮志を抱け！」

「それって全然繋がってないし、ていうかちよっと待ってよ正臣い！」

突然走りだした正臣の背中を追い掛けながら、帝人は小さく願う。

これからも続く友情を、
意中の少女には心からの安息を、
そして池袋で暮らしすれ違って行く全ての人に、ほんのささやかな
幸せを――

星の见えない空の下、紛い物を詰め込んだような街で今日も物語は
紡がれる。
少年の他愛も無い祈りは、池袋の底知れぬ闇へと吸い込まれるよう
に消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1584/>

< 今日も平和な池袋 >

2010年10月13日16時05分発行